

親鸞思想における「十念」の意義

常 塚 勇 哲

親鸞は『教行信証』で、行一念釈・信一念釈を設け、行と信の分際を明確にした。一方、法然も重要視した十念を『教行信証』で直接的に解釈しない。このことから、親鸞思想における十念の研究は、和語聖教で直接に解釈される箇所を中心に行われてきた。しかし筆者は、『教行信証』行巻で『大經』流通分「乃至一念」を行の一念と解釈し、続けて『安樂集』十念相続を含む文を引用する事から十念相続に注目する。

『安樂集』十念相続は、元は曇鸞が『論註』で独自に製作した術語を展開したものである。これら十念相続は、『觀經』具足十念が課題だが、行の一念に続けて引用するから親鸞が十念を行の一念の相続の課題と見ていたといえる。それ故に親鸞思想における十念の意義を考察するには、一念との関係でそれぞれの十念相続に注目すべきと考える。

まず行巻十念相続から確かめる。親鸞は行の一念を、

凡^ソ就^ニ往^ニ相^ニ回^ニ行^ノ信^一行^ニ則^有一^リ念^一亦^信有^リ言^ニ行^ノ之^一念^ト者
謂^ワク就^ニ称^ニ名^ノ偏^ニ数^ニ顯^ニ開^ス選^ニ択^ニ易^ノ行^ノ至^ニ極^一

と述べるように、称名念仏を課題とする。更に続けて、『安樂集』十念相続を以下のように引用する。

『安樂集』ニ云ク十念相続ト者是聖者ノ一ノ数ス之名耳^{ナラクノミ}即能ク積^ミ念^ヲ
凝^コ思^シ不^レ縁^ニ他^ニ事^一使^メ業道成辯^セ便^チ罷^ス

この十念相続は、一つの数の名であり、その課題は、数にこだわる事なく称名念仏を積み、業道成辯する事と示される。

業道成辯は、『論註』では業事成辯である。これは「往生のための業がまったくとのつたこと」⁽³⁾を指し、従来は業事も業道も同じ事柄とされる。しかし、親鸞は「道は則ち是れ本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり」⁽³⁾と述べ、道を重要視する。またこの道を二分二分歩む事を、「一年二年すぎゆくにたとえたるなり」⁽⁴⁾とも述べ、道に歩みという生涯を貫く仏道の課題を見ている。また親鸞は十念相続の引用を終え、「斯（れ）乃（ち）真実の行を顯す明証なり（…）至極無

碍の大行なり⁽⁵⁾」とし、十念相続の課題も含め真実の行を顕す明証至極無碍の大作とする。この事から行の十念相続の意義は、一念に留まる事なく、数に拘る事なく生涯念仏相続せよという大行の呼びかけといえるだろう。

次に信巻十念相続を確かめる。親鸞は信楽の一念を、

夫按スルニ真実信楽^ニ信楽^ニ一念有リ一念者斯レ顯シ信楽開発ノ時剋之極促ヲ彰ス広大難思慶心^ニ也⁽⁶⁾

と述べ、信楽が衆生に開発する瞬間を顕し、また広大難思の慶心を彰すとする。この信楽の一念に対し、『論註』十念相続は信巻末の唯除の課題を示す逆謗損不の問答の八番問答の第七問答に示される。親鸞は唯除の課題が展開される箇所です念相続が明らかにされるべきと見ていたのである。親鸞はその引用前に、

夫レ扼^リ諸大乘^ニ説^{ケリ}難化ノ機ヲ今『大經』ニハ言^フ唯除五逆誹謗正法^ト或ハ言^フマヘリ唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人^ト『觀經』ニハ明^{シテ}五逆^ヲ往生^ニ不^ス説^フ謗法^ヲ『涅槃經』ニハ説^{ケリ}難治ノ機ト与^テ病斯^レ等ノ真教云^ク何思量^{セム}邪報^{ヘテ}導^ク『論ノ註』ニ曰^ク

と『大經』『觀經』の教説の矛盾を問う。そしてこの問いに報えるとして八番問答を引用する。ここで注目したいのは、「夫れ」である。先学が『教行信証』においては以前に述べ

たことを承けている場合に用いられ、単に文の変わり目を示すだけではなく、以前の事柄を統括した上で、さらに必然的に問題の論点が次に展開することを示す文字である⁽⁸⁾と指摘するように、この問答は直前の『涅槃經』に連関し、その課題を引き承けている。また、その『涅槃經』の引用の冒頭も、

誠知悲哉愚禿沈没^シ於^ニ愛欲ノ広海迷^ニ惑シテ名利ノ太山一不^{ヨコ}喜^{コバ}入^{コトヲ}定聚之數^ニ不^サルコトヲ快^シ近^ニ眞証之証^ニ可^シ恥可^シ傷^ム矣夫レ仏説^フ難治機^ヲ『涅槃經』ニ言^フハク

と「夫れ」があり、親鸞の自己の罪障性の歎きを顕す悲歎述懐を承けている。これは自己反省という次元の悲歎ではない。ここに「入正定聚」「近眞証之証」とあるように、それらが親鸞に感得され表明される悲歎である。つまり親鸞が一念に実現する現生十種の益で「入正定聚の益⁽¹⁰⁾」を示す事から、この悲歎は、信楽の一念の願成就の事実に立脚し知らされた我が身の事実への悲歎である。親鸞はこれを承けて『涅槃經』引用を始めるのである。

これらの「夫れ」に注目すれば、八番問答が引用される箇所は、『涅槃經』の引用を承け、更に遡れば悲歎述懐を承け、根源的には信楽の一念から展開されたといえる。反対に言えば、一念に悲歎される我が身の事実が引き起こす問いであ

り、それに報えるものとして、十念相続の課題が展開される八番問答と位置付ける事が出来る。

その八番問答の第七問答で十念相続が示される。親鸞は、曇鸞の問いの端緒である第一問答を引用しない。この事で、信巻所引の八番問答は第二問答以降に展開される誹謗正法に引用の主題が転換される。その第二問答から第五問答では、五逆罪が正法無き事より生ずる為、誹謗正法が最も重い根源的な罪と確かめる。また第六問答は、ここまでの展開の上で、五逆・十悪・繋業等と十念の軽重を問題とし、在心・在縁・在決定の視点から十念と五逆罪の拠り所を示し、十念が重たる事を明かしている。そして続く第七問答から、十念の内実が明かされる。

問曰イフハ幾ナニ時トキ名ナ為ナリ二ニ念ニ答曰コタヘ百ヒャク一イチノ生滅シヨウメツ名ナ二ニ利那リナ一イチ六十ロクジュウノ利那リナ名ナ為ナリ二ニ念ニ此コノ中ナカニ云イフ念ニ云フ者ハ不レ取ル此コノ時節ジキョウ一イチ也ヤ但レ言フナリ憶オモ念ニシテ阿弥陀仏アミトブツ一イチ若ハ総相若ソウサウワカハ別相隨ベツサウジテ所觀ショカンノ縁ニ心ニ無クシテ他タ想ソウ一イチ十念相続ジュッセンスルヲ名ナ為ナリ中ナカニ十念ジュッセン但レ稱ネン二ニ名ナヲ亦復如モトモト是コト一イチ

ここでどれほどの時を一念とするかを問い、六十の利那と答え、この念とは、時節の意ではないとし、この十念は、ただ阿弥陀仏を憶念し、観じられた縁に随い、心に他想なく十念相続する事と示す。また名号を称する事も、憶念相続と同様の課題を持つと述べて、次の第八問答へと続いていく。

問曰イフハ心若シ他縁タガヒセバハ撰センシテ之ノ令メテ還ヘラ可シ知ル念之多少ニ但知ハ多少ヲ復非フシ無ク二ニ問ニ若シ凝コウ心ニ注ツニ想ソウ一イチ復依フタヘテ何ニ可シ得ユ記キ二ニ念ニ之多少ヲ答曰コタヘ『經キヤウ』三言ミコトワカフ一イチ十念ジュッセンノ者ハ明アカラシニ業事成辯ゴウジキヲ耳ミミクミト不レ四シ必須キナラク知頭数チウソウ也ヤ如コト下カミシ言イフ中ナカニ蠅エウ蚶カキ不レ識シラニ春秋シュンシュウ一イチ伊虫豈イムウニ知ルニ朱陽シュヨウ之節セツ乎ヤ上カミ知ル者ハ言イフニ之ノ耳ミミクミト十念業成ジュッセンゴウジキト者ハ是亦通コトモトモトニ神カミ一イチ者ハ言イフニ之ノ耳ミミクミト但積タマシニ念ニヲ相続サウジツシテ不レ三ミ縁ニセ他事タガヒノコト一イチ便罷ヒョウハニ

ここで十念の心では数の多少を知る事は出来ない問い、それに對し十念は業事成辯を明かすのであり、念の頭数を知る必要がないと示す。更に十念に往生の業が定まるのは神に通ずる者が言うのであり、衆生には、ただ（憶）念を積むという相続を要請すると確かめる。

これら第七問答、第八問答を通じ、信巻十念相続の課題は、ただ阿弥陀仏を憶念し観じられた縁に随い、念の頭数に拘らず相続し業事成辯する事にある。ここで親鸞が業事成辯に「ワキマウ」と左訓する事が注目される。先述したように信巻の一念で悲歎する他ない我が身を生きている事が知らされ、それを承け、この問答が展開される事を確かめた。ここで「ワキマウ」と左訓する事に悲歎の身を生きる事実を弁う意義と見出せば、親鸞が願成就の一念を転釈する中で「憶念」とも「相続心」とするから、十念相続が課題とする業事成辯は、悲歎のわが身の事実を知らせる憶念の一念に立ち返り続ける事を課題とするといえる。親鸞は一念に立脚し、開

かれた問答で、我が身の事実には立ち返り続けるべき事を『論註』十念相続の課題とし、信の相続の意義と明らかにしている。

親鸞は行の課題の十念相続は業道成辯という生涯称名念仏を相続する仏道を歩む事を要請し、また信の課題の十念相続は業事成辯の我が身の事実を弁うという身の事実を明かす一念に立ち返り続ける事を願う憶念の相続の意義としていた。

更に『論註』十念相続は、名号を称する事も憶念相続と同様の課題を持つ事が示されている。この事と行巻十念相続の生涯称名念仏を相続せよという呼びかけに重なりを見れば、『安楽集』十念相続も、我が身の事実を明らかにする憶念の相続を課題とするといえる。

このことから親鸞思想における十念の意義を、一念との関係で確かめれば、衆生に生涯にわたって一念に立ち返り続ける相続の歩みを与える教言といえるだろう。

- | | |
|----------------|--|
| 1 定親全一、六八一六九頁。 | 2 定親全一、七〇一七一頁。 |
| 3 箕輪一九九五、一四五頁。 | 4 定親全三「和文編」、一五〇頁。 |
| 5 定親全一、七二頁。 | 6 定親全一、一三六―一三七頁。 |
| 7 定親全一、一八四頁。 | 8 難波二〇一六、三九頁。 |
| 9 定親全一、一五三頁。 | 10 定親全一、一三九頁。 |
| 11 定親全一、一八八頁。 | 12 この十念の理解は様々あるが、基本的には武田二〇一一、二六七―二六八頁の意見に賛同する。また本論では行信それぞれの一念と |

対応させて十念を理解する。 13 定親全一、一八八―一八九頁。

14 定親全一、一三九頁。

〈参考文献〉

- 武田晋『往生論註』の十念思想の一考察『真宗学』第二二三号・第一二四号、二〇一一
- 難波教行「其れ等の真教云何思量せむや」『親鸞教学』第一〇五号、二〇一六
- 箕輪秀邦『解説浄土論註』真宗大谷派出版部、一九九五

〈キーワード〉 十念相続、十念、一念、憶念

(大谷大学大学院)